第40回全国高等学校軟式野球選手権大会
出　場　報　告

秋田県立能代高等学校

お礼のことば

全国軟式野球出場派遣委員会
委員長　神馬恒成

能代高等学校軟式野球部の第四十回全国高等学校軟式野球選手権大会出場に際しましては、多くの同窓生並びに県内外の多数の皆様方、各市町村、各企業から物心両面にわたりご支援ご芳情を賜りまして、誠にありがとうございました。心より厚く御礼申し上げます。

三年ぶり十一回目の全国大会出場でありましたが、みごと三度目の決勝進出を果たすことができました。決勝戦は北関東代表作新学院高校と対戦し、先制したものの後半逆転を許し、十三年ぶり二度目の全国制覇の夢は叶いませんでしたが、〝軟式野球の能代〟健在と全国に印象づけることができました。また今年は、能代高等学校にとって創立七十周年という記念すべき年でした。この節目の年にあたり、軟式野球部の活躍が、日ごろ本校教育にご支援くださっている関係各位、同窓生、父母、在校生相互の結び付きをさらに強固にしてくれたことも大変喜ばしいことでした。

皆様からお寄せいただきました寄付の総額は一千七百万円あまりにのぼり、私たちの予想をはるかに上回るものでした。改めて地域の皆様の本校に寄せる期待の大きさを再認識した次第です。お蔭様で選手・部員の派遣費並びに応援団員・新聞部員の応援費用として決算書のとおり大切に使わせていただきました。なお余剰金は次期軟式野球部全国大会派遣基金として管理していくことといたしましたのでご理解賜りますようお願い致します。

皆様の温かいご声援に応えるためにも本校関係者一同、より一層の努力をしてまいりますので、今後も引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げてお礼の言葉と致します。

お礼のことば

校長　小野寺清

この度の第四十回全国高等学校軟式野球選手権大会出場に際しまして、四千二百名を超える皆様方から、心温まる御声援と多額の御寄付等、物心両面にわたる御厚情を賜り、厚く御礼を申し上げます。

今回は三年ぶり十一度目の出場となりましたが、秋田県大会、北奥羽大会とも苦しい戦いの中で、選手は最後まであきらめずに頑張りぬく執着心やチームワークの大切さをしっかりと身に付け、全国大会に参りましても、この結束力は衰えることはありませんでした。

初戦は、地元布施高校の大応援団に動揺することもなく三対一と堂々たる勝利をあげ、続く二回戦法政二高校、準々決勝松商学園高校、準決勝北海道工業高校といずれも機動力に小技をからませた鮮やかな戦いぶりでした。

残念ながら決勝戦では作新学院高校に六対一と力負けしてしまいましたが、選手一人一人が三十度を超す猛暑に音をあげることもなく生き生きとプレーをし、日増しに逞しくなる姿は誇らしく思えてなりませんでした。

久し振りに「軟式の名門」能代高校ここにあり、と全国に知らしめ、閉会式で牧野高野連会長からその戦いぶりのさわやかさにねぎらいの言葉を頂き、嬉しさで目頭が熱くなりました。

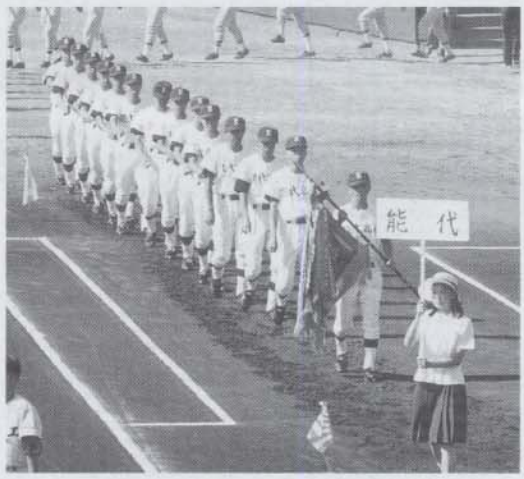
また、この全国大会準優勝は、創立七十周年の記念の年に添えられた大きな華であり、ひとえに皆様からの御支援、御協力の賜であると心から御礼を申し上げます。今後とも校訓「至誠力行」に恥じぬよう、一層の努力を重ねることを決意いたし、御礼の言葉といたします。

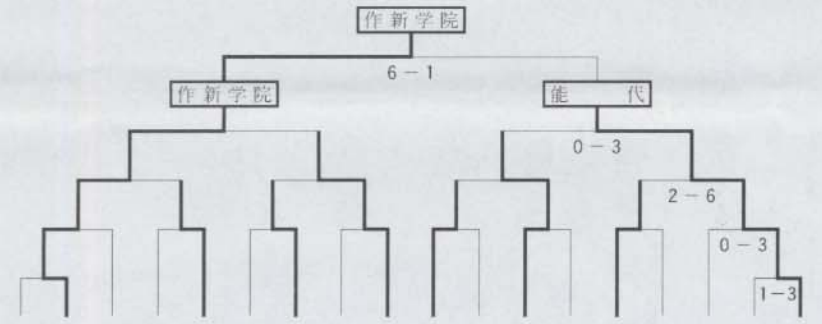
大会報告

全国高等学校軟式野球選手権大会

とき　平成七年八月二十五日～二十九日
ところ　兵庫県明石公園球場

部長　銭谷雅昭
監督　飯坂尚登
マネージャー　松山宜之
投手　佐藤太亮
捕手　佐藤公誠
一塁　金山佳人
◎二塁　落合覚
三塁　若林学
遊撃　中川学
左翼　網浜弘樹
中堅　幸坂伯文
右翼　松長輝明
補欠　原田宏之
補欠　武田孝将
補欠　工藤長士
補欠　袴田洋介
補欠　防慎太郎
補欠　周
（◎印主将）





夢に向かって

監督　飯坂尚登

「全国大会優勝」昨年新チームで練習を始めたときに選手達と決めた目標である。

目標達成のために何をすべきか、何ができるのかをいつも考えて練習ができれば、絶対に不可能ではないはずだ。一番大切なことは、目標にむかって自分を信じることであり、自分自身に厳しさを持てるかどうかではないかと思う。

今年のチームが全国大会の決勝戦で全国優勝をかけた試合を経験することができたのは、シーズンオフの期間に厳しいトレーニングをやり通すことができた賜である。ともすれば手を抜きがちな練習であるが、チーム全体が、厳しさをみんなでやっている楽しさに変えて続けることができたことは、今年のチームの素晴らしい力であり、後輩達への大きな財産を残してくれたと思っている。

シーズンに入ってからは春季大会で一回戦負け、七十周年の招待試合では全敗とさんざんな結果であったが、夏の本番に向けて負け試合を力にすることができたことも大きかったと思う。また、県と奥羽の予選での苦しい戦いが全国大会でののびのびしたプレーにつながったと考えている。

全国大会初戦の前夜、布団に入ってから明日の試合をどう戦うか考えた。

「一番落合が塁に出る。バントかいやここまできたからおもいきって盗塁。二番若林が送りバント。三番松長がカウント1―2からスクイズで先取点だ。」このパターンができれば勝てるのではないかと思いつつ寝たのだが、初戦の一回裏にそのとおりに先取点を取ることができた。

選手の夢と私の夢が一つになったとき、壁を一つ乗り越えられるのを実感した。

●一回戦

八月二十五日　十二時
高砂市営野球場

布施（大阪）	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
能代	1	0	0	0	1	0	0	1	×	3

（布施）木戸―西村
（能代）佐藤太―佐藤公
三金山（能代）

初回裏一番・落合が左前打で出塁し、すかさず二盗。続く若林の送りバントは幸運な内野安打となり、若林二盗後の無死二、三塁から松長が投前スクイズを決め、足を絡めた鮮やかな攻撃で先取点を挙げた。

五回には二死から左前打の若林、四球の松長を一、二塁に置いて四番・網浜の中前適時打で1点を追加。八回にも一、三塁からディレードスチールを敢行し、三走・金山が三―本塁間に挟まれたものの、捕手の悪送球で生還し、決定的な追加点を挙げた。能代の主戦・佐藤太は四死球6と制球こそ今一つだったが、外角低めに伸びのあるストレートを集め、散発5安打、8奪三振の好投。最終回、二死二、三塁からボークで1点を献上したものの、投打ともに能代が力でねじ伏せた試合だった。

全国大会での初戦突破は昭和六十年の第三十回大会以来のことである。勝ちが決まった瞬間、三塁側応援席は、総立ちでナインの健闘を祝福した。応援席には小野寺清校長、大塚和行PTA会長、応援団、新聞部員、それに軟式野球部父母の会（幸坂文雄会長）らメンバーら総勢約五十人が寝台列車や貸切バスで明石入り。関西在住の県人会や同窓会の関係者も球場に駆け付け、一緒になって声援を送った。

●二回戦

八月二十六日　十一時五十分
明石公園球場

法政二（神奈川）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
能代	2	0	0	0	0	1	0	0	0	×	3

（法政二）津田知―前田
（能代）佐藤太―佐藤公
三松長（能代）二松長（能代）

初回、先頭・落合が死球で出塁し、二盗後若林の内野安打と松長死球で無死満塁の先制機をつかみ、網浜の投前スクイズでまずは1点。続く幸坂も三塁線寄りに2点目のスクイズ（記録は内野安打）を決め、法政二の主戦・津田知の立ち上がりをゆさぶった。

五回にも二死から松長が左中間三塁打を放ち、網浜の遊ゴロで生還。3―0とリードを広げた。

能代主戦・佐藤太は六回まで無安打ピッチング。七回に無死満塁、九回にも二死満塁のピンチこそ招いたが、コーナーを丁寧に突く投球で後続を打ち取り、零封した。

初回に先取点を奪って幸先良いスタートを切った能代が、終始優位に試合を進めて3―0で快勝し、ベスト8進出を決めた。

試合をふりかえり、飯坂尚登監督は「厳しい場面もあったが、初戦と同様、いい感じの試合運びができた。国体出場の目安となるベスト8進出を果たせたことをまずは喜びたい。」と語った。

ヤッター！
落合主将

プラカード嬢とパチリ！　能代ナイン

校友時報

明石速報④

明石発FAX
1995.8.28
（新聞部）
・小玉礼美
・柴田優子
FAX
0185-55-2230

試合前の選手達は…
昨日の疲れは見られなく、シートノックでは"明石球場だから"というような緊張している感じはなく、黙々と練習していた。

落合キャプテン
・ピッチャーがよく頑張った。守りもきちんとできたと思う。次の試合では、相手校のピッチャーが良いと聞いているので、とても楽しみ。

飯坂監督
・今日はいい形で先取点がとれたし、ピッチャーの時もよく守った。チームワークで頑張ったと思う。相手チームはまとまっていたし神奈川代表だったから、そこ相手によくやった。次の試合は皆で楽しくプレーしたい。

◎小野寺校長先生
「ピッチャーが良かったですね。後ろも3年生がよく守った。それに尽きる！。」

●準々決勝

八月二十七日　十一時五十分
明石公園球場

松商学園（長野）	0	0	0	1	0	0	1	0	0	2	
能代	1	0	1	0	1	0	2	1	×	6	

（松商学園）小沢―浅田
（能代）佐藤太―佐藤公
三古田（松商学園）二金山（能代）

初回、四球で出塁した先頭・落合を若林が送り、松長の中前適時打でまずは先取点。三回にも三遊間安打の落合が送りバントで二進すると、すかさず三盗も決め、松長のスクイズで2点目を挙げた。

四回に守備の乱れから松商学園に1点を返されたものの、五回には、二死二塁から金山の一塁手横を抜く適時二塁打で引き離し、八回には無死満塁から金山、佐藤公の連続犠飛で2点を追加、試合を決めた。

主戦・佐藤太は7安打を許したが、要所を抑えて松商学園の反撃を断ち切った。守備陣も序盤にミスが目立ったものの、五回以降は堅い守りで好投する佐藤太をもり立てた。

初戦から準々決勝まで、いずれも初回に機動力を生かして先取点を挙げた能代だが、攻撃の"切り込み隊"となっているのが落合と若林の一、二番コンビだ。

「一、二番で先取点をものにしよう」とチャンスメーカーになることを誓って挑んだそうだが、まさにそのとおりの活躍。松商学園戦でもその力を十分に発揮した。

落合（左）、若林の1、2番コンビ

試合中の1コマ.

地元の小学生から声援

対松商戦前、地元の少年野球チームだろうか。小学生が三塁側（能代高）に応援。開始直前、三人の男の子がフェンスの所まで降りて行って「がんばれよー！」と選手達に激励。選手達も笑顔で応える。程良くリラックスしているようであった。

7回裏、能代は無死満塁から金山の中犠飛で三走・松長が生還、4点目。

●準決勝

八月二十八日　十一時五十分
明石公園球場

北海道工	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
能代	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	×							3

（北海道工）余語―高島
（能代）佐藤太―佐藤公
三落合（能代）三落合（能代）

序盤は得点機でのスクイズを本塁で封じられるなど北海道工を攻めあぐんだ能代だった。四回、三遊間安打とボークで二進した先頭網浜を幸坂が送って、一死三塁とし、続く金山が四球を選んだあと二盗を決め、二、三塁。ここで佐藤公の遊ゴロは幸運な内野安打となり、網浜が一気に本塁をついてまずは1点を挙げた。

その後中川の四球で満塁としたあと、佐藤太がスクイズを試みたが、打球が正直すぎたため三走・金山は本塁で惜しくもタッチアウト。しかし前の打席で三塁打を放った落合が二死から左越えの2点適時打を放ち、3―0と貴重なリードを奪った。

主戦・佐藤太はカーブ主体の投球で六回までそれぞれ打者三人に打ち取る好投をみせ、八回に失策と内野安打で一死二、三塁のピンチを迎えたものの、後続を連続三振に抑え、九回も一死で走者を二塁に背負いながら後続を三振と一ゴロに打ち取り完封。

決勝進出が決まった瞬間固唾を飲んで見守っていた応援席は喜びに包まれ、「次は全国制覇だ。」と夢も大きく膨らんだ。

猛暑の中、学制服でがんばった応援団

●決勝

八月二十九日　十二時三十分
明石公園野球場

作新学院（栃木）	0	0	0	0	0	0	3	2	0	1								6
能代	0	0	0	0	1	0	0	0	0									1

（作新学院）小林―磯貝、阿見
（能代）佐藤太―佐藤公

お互いの健闘をたたえ、熱き握手

三金山（能代）

佐藤太、小林と両主戦の投げ合いの試合が動いたのは五回。能代先頭の金山が右翼手横を抜く二塁打で出塁し、パスボールで三進。ここで続く佐藤公が二球目を投手前にスクイズし、金山が生還。一気に勢いに乗るかと見られた。

しかし、五連投の佐藤太は少しずつ制球に甘さが目立つようになり、六回一死後、死球のあとの連打で同点とされ、二死二、三塁から2点適時打を浴びて逆転された。七回にも焦りから浮き足立った守備が乱れ2点を追加され、大きくリードされた。

能代はその後、再三の好機をつかむが、決定打が出なかった。

試合は1―6の完敗だったが、五連投の主戦・佐藤太の気迫ある投球、果敢にスチールで進塁する機動力野球を随所に見せ、応援席をわかせた。昭和五十四年以来の準優勝という堂々とした成績を残し、能代ナインはさわやかな笑顔とともに五日間に亘って戦った明石公園野球場を後にした。

（戦評は8／26～30の北羽新報紙面より転載）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

全国大会を終えて

部長　銭谷雅昭

今大会を振り返ってみると、高校軟式野球は、かつて本校が八年連続して出場した時代のものとは大きく変化しているように思います。バッティングの技術向上等で点数が多く入るようになった事、そのため、一人の投手で勝ち抜いていくのが難しくなった事、私立の学校が多く出場するようになった事などさまざまな原因が、考えられます。その厳しい状況の中で、本校が四試合を勝ち抜き決勝に進出したことは、大きな価値があります。

秋季大会、春季大会とも初戦で敗れ、全国大会の予選も接戦の連続でした。このような厳しい試合を戦い抜いてきたことが自信になり、全国大会では苦しい場面でも落ち着いてプレーすることができたと思います。また、来年以降も全国大会で戦えるチームを作るための土台を築いたということでも、意義のあるものでした。

選手達が存分に力を発揮できるように支援してくださった方々に心から感謝いたします。

オメデトウ！　全国準優勝!!

観戦記

ＰＴＡ会長
大塚和行

北国では過ぎゆく夏のあまりの短さを朝夕の風に感じられる頃、明石市は気温が連日三十度を越え、真夏日の連続記録更新中であった。とにかく暑い。私達にとっては酷暑であり超真夏日である。

開会式前日の夕方明石に到着した私達は、早速選手諸君の宿舎へ。車中の話題は道すがら目の当たりにする被災建物によって、どうしても阪神大震災のことになってしまう。さて、三年前の雪辱を晴らすべく、些かの気負いを持って乗り込んだ私と違い、宿舎での選手達は如何にも自然体であり、もしかしたらやってくれるのではの期待感さえ抱かせてくれた。時を同じくして、秋田県大阪事務長を始め近畿県人会の皆様も、わざわざ激励に来訪。

灼熱の太陽のもと開会式は明石球場で。本校選手諸君の堂々たる入場行進は覇気が充分に感じられる。

一回戦は所を高砂球場に移しての戦い。車が混んでいるのか、道順選択に誤ったのか、我々応援団の乗った現地調達のバスは、車で混雑している道を時間をたっぷりかけて高砂球場へ到着。さて試合の相手は大阪代表、いわば地元。応援の生徒が電車で続々と詰めかける。チアガール、吹奏楽もいる。しかし、松陵健児伝統の学制服に身を包んだ男子応援団、故郷を思う県人会や同窓会の皆様、父母の会、学校関係者の熱い応援には、幾ら地元の利や数できても敵うはずがない。試合と応援共に完勝。「もしかしたら」の「もしか」となる。

翌二十六日の二回戦からは明石球場。この日も超真夏日。土曜日ということもあり近畿応援団が増員される。お互い久しぶりの再会に、近況報告に花を咲かせながらの応援である。二回戦も完勝。「もしかし」となる。

名門松商学園にも臆することなく、これまた身上のチームワークを発揮して楽勝。超真夏日が続く中、選手諸君の健闘が光る。日曜日の応援席は、近畿応援団がさらに増え、勝利の瞬間には優勝を予言する人さえ。「もしかした」となる。

さて準決勝まで進出すると、何としても決勝に勝ち進んでもらいたくなる。この願いのもと選手と応援席が一体となり、好試合を展開し終始余裕の勝利を収める。こんなに何日も楽しみながら応援する事ができて感謝している、とは近畿応援団の皆様の弁。皆勤者が何人もいらっしゃる。「もしかしたら」になってしまった。

決勝戦。何とも形容しがたい雰囲気が漂う。ここまでくれば気持ちは、勝敗を微妙に左右するのだろうか。残念ながら試合終了後の校歌は作新学院が唱った。しかし、大健闘である。校歌を四回も唱ったのだ。

ところで、今回の野球は勿論のこと人生全てに於いて、人は常に周りの人々の手を借りながら生活しているのである。選手諸君には、準優勝の栄誉と今回受けた人の心の温かさを大切にしてほしいと思う。

最後になりましたが、本校軟式野球部全国大会並びに国体出場に際しましては、ＰＴＡ会員を始め地域の皆様や各方面から多くのご厚志を賜り、またご声援頂きましたことに対しまして、紙上を借りて心から深く御礼申し上げます。今後とも、能代高等学校へのご支援ご鞭撻の程何卒宜しくお願い申し上げます。

監査報告書

平成７年10月12日、第40回全国高等学校軟式野球選手権大会派遣会計について、別紙決算書に基づき、現金出納簿、預金通帳、証拠書類を精査いたしましたところ、収支、支出とも執行は適正であり、出納関係も正確であることを認めます。

平成７年10月12日

会計監査　大坂昇一
　　菊地晴行
　　伊藤正人

今後の支出額

報告書印刷費	３７９,０００円
報告書郵送料	３１５,０００円
報告会費	４５０,０００円
記念碑文字彫刻費	７４,０００円
用具費	７１９,０００円
庶務費	３５０,０００円
合計	２,２８７,０００円

最終見込残金

現在残高	８,３４９,８８８円
今後支出見込	２,２８７,０００円
最終見込残高	６,０６２,８８８円

《余剰金の使途について》

余剰金の使途について10月12日派遣委員会において検討した結果、平成４年の派遣に準じて、軟式野球部の次期全国大会派遣基金に充てることに決定しましたので、ご了承下さいますようお願いいたします。

※次期軟式野球部全国大会派遣基金の管理・運用について
この基金は次期派遣まで、全額そのまま残すこととする。

1、この基金の管理・運用のために管理運用委員会を設置することとする。

2、管理運用委員会の会長には同窓会長を、委員にはＰＴＡ会長・同窓会会計監査及び学校長をそれぞれ当てる。

第40回全国高等学校軟式野球選手権大会 派遣費収支決算書

能代高校全国高等学校軟式野球選手権大会出場派遣委員会

（収入済額）　（支出済額）　（差引残額）

21,112,675円－12,762,787円＝8,349,888円

収入の部

項目	予算額	決算額	比較増減	摘要
1 派遣基金	3,000,000	3,000,000	0	平成4年度派遣基金軟式分
2 高野連補助	399,000	459,360	60,360	高校野球連盟より補助金
3 支援寄付金	6,600,000	17,653,226	11,053,226	寄付金延べ4,250件
4 雑収入	1,000	89	△ 911	預金利息
合計	10,000,000	21,112,675	11,112,675	

支出の部

項目	予算額	決算額	比較増減	摘要
1 総務費	900,000	1,216,341	316,341	印刷費 251,423 通信広告等 381,326 会議費等 583,592
2 選手派遣費	3,720,000	5,723,465	2,003,465	交通費 2,047,284 宿泊費 2,051,496 補食費等 572,177 行動費 584,670 雑費 467,838
3 応援団派遣費	2,480,000	3,188,981	708,981	交通費 1,008,590 宿泊費 1,458,913 雑費等 321,478 父母補助 400,000
4 用具購入費	2,000,000	1,984,000	△ 16,000	ユニフォーム・バット・ボール等
5 予備費	900,000	650,000	△ 250,000	記念品
合計	10,000,000	12,762,787	2,762,787	